

飯田市五郎田遺跡  
直弧文施文高杯

# 信州の遺跡

第21号

## 最新発掘調査情報 1

### 37年ぶりの再会

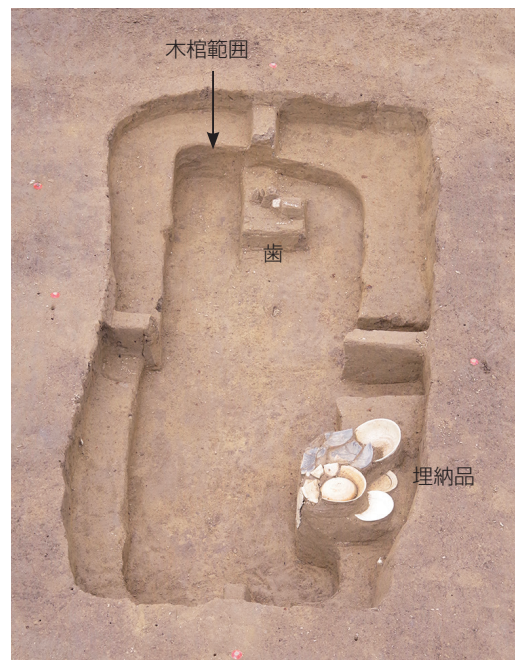
松本市 南栗遺跡

遺跡は、鎖川左岸の自然堤防背後の傾斜面に立地する。1985・86年に長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡322軒、<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物跡103棟など多数の遺構が密集して重複するこの古代集落を調査した。あの時から37年ぶりに、埋文センターは「南栗遺跡」を調査することとなった。今回の対象面積59,400㎡に及ぶ、「南栗遺跡」の長い調査の始まりである。

昨年度は長野自動車道の西側隣接地で調査したところ、遺跡範囲の南端付近で、遺構は希薄もしくは存在しないと予想したのに反し、奈良・平安時代の竪穴建物跡34軒、掘立柱建物跡5棟、<sup>もっかんぼ</sup>木棺墓3基、溝跡1条などが発見された。竪穴建物跡の推定時期から、8世紀中葉から10世紀後葉の集落が長野自動車道の西側まで広がることが判明した。

なかでも、もっとも注視される遺構は木棺墓3基である。3基とも形状は長方形で、長辺は南北方向を向く。木棺そのものは残っていないが、土層の違いなどから木棺の形状を確認した。木棺の規模は、どれも長辺1.8m、短辺0.5～0.6mで、骨（<sup>かみ</sup>歯）の出土位置から頭部を北に置いて埋葬されていたようである。2基の木棺墓（SK02・11）からは埋納品が出土した。SK11の隅（<sup>かいゆうとうき</sup>頭部推定地付近）には灰釉陶器の<sup>しょうへい</sup>小瓶2個が並んでいた。また、SK02の隅には灰釉陶器の碗2点と皿2点、内黒土器の碗1点がまとめて埋納されていた。出土品から、SK11は9世紀後葉、SK02は10世紀後葉と推定され、時期が違う2つの木棺墓は、古代集落の消長との関連性を考える上で興味深い。

今回の調査では、長野自動車道の調査で把握できなかった新知見が得られつつある。今後継続される松本ジャンクションの調査によって、南栗遺跡の実像がさらに明らかになるものと期待している。（河西克造）



木棺墓（SK02）全景（写真上：北）



木棺墓（SK11）に埋納された小瓶



## 朝鮮半島で作られた 「百済土器」を発見！

飯田市 川原遺跡

川原遺跡は、天竜川左岸の低位段丘上に立地している。2022年度に発掘調査を行い、古墳時代の竪穴建物跡4軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。竪穴建物跡からは、多くの土器が出土し、なかでも、古墳時代中期中葉～後葉（5世紀中頃）の竪穴建物跡（SB4）のカマド付近の床面から須恵質の杯形土器が発見された。

この杯形土器は平底で、体部下半から底部端部にかけてケズリ成形、底部に「ゲタ痕」を観察することができた。これらの形態や製作技法の特徴から、4～7世紀に朝鮮半島西部にあった百済で作られた「百済土器」であることがわかった。東日本で5例目、飯田市内では3例目の発見になる。川原遺跡出土の杯形土器は、韓国考古学では「盃」と表記される、普段使いの生活雑器とされる。

飯田地域の古墳時代の遺跡では、馬具の出土数が多く、他地域には少ない馬の埋葬事例も複数あり、馬飼育の拠点があったのではな

いかといわれている。当時、朝鮮半島からは大勢の渡来人が日本へやって来るなかで、百済と強いつながりを持っていたヤマト政権は最先端の技術を取り入れていて、馬飼育もその1つと考えられている。百済土器と馬飼育を直接結びつけることは現段階では難しいが、百済からやって来た渡来人の日常の生活を想定できる器が川原遺跡の集落でみつかったことは、今後の飯田地域の古墳時代やその馬文化を考える上で非常に重要である。

（春日皓介）



百済土器出土状況（写真手前）



百済土器（高さ約4cm） 平底で体部下半のケズリ成形が特徴



百済土器の平部（ゲタ痕）

ちよっこもん  
「直弧文」が描かれた高杯 飯田市 五郎田遺跡

飯田市五郎田遺跡から直弧文が描かれた高杯が出土した。集落内の土坑の中から小型壺や甕などと一緒に出土した古墳時代中期のものである。直弧文は高杯の脚部全体にあり、縦にまっすぐに伸びる脚とその下に屈折して下に広がる裾の部分とで種類が異なる。脚部も裾部も残存状態が良好で文様の全体をみることができる。文様は脚で約4cm、裾では約2cm幅の中に細い線で複雑な文様が下書きなく描かれていることから、文様を描くことに慣れた人物によって描かれたことが考えられる。

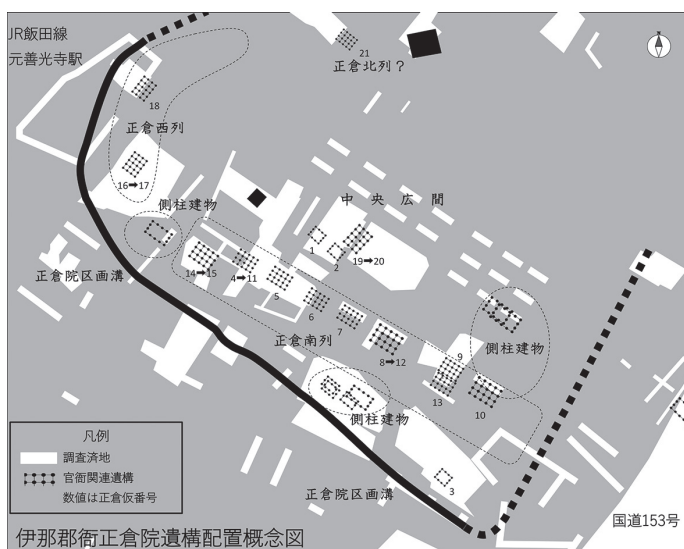
直弧文は、古墳時代全般を通して装飾古墳や埴輪、刀剣類などに描かれた、主に古墳に関わる文様である。土器に描かれた例は少なく、集落内から出土したことは注目される。また、高杯はその特徴から地元で作られたものと考えられることから、直弧文を描くことができる人物が飯田地域にいたことが推測される。馬の生産など古墳時代中期において重要な役割をもっていた飯田地域を考えるうえで重要なものといえる。（遠藤恵実子）



直弧文が描かれた土器

しょうそういん  
見えてきた正倉院 飯田市 史跡 恒川官衙遺跡

恒川官衙遺跡は、飛鳥・奈良・平安時代に設置された伊那郡衙の遺跡である。近年の史跡整備に先立つ確認調査により、伊那郡衙正倉院の姿が明らかになってきた。正倉院の南西辺は幅約3m、深さ約1mの区画溝によって区画されているが、その平面形は都城のイメージとは異なり、方形とはいえない不整形となる。正倉と判断した遺構は22棟確認でき、正倉の建物規模、正倉院の遺構配置、正倉の変遷等を確認した。奈良・平安時代の正倉は区画溝におよそ並行して建ち並び、院の中央に空閑地が広がる。掘立柱から礎石建への変遷が確認されており、区画溝を切る竪穴建物の存在から少なくとも10世紀末には廃絶して集落化している。奈良時代以降の正倉の規模は原則4×3間と考えられ、床面積は40㎡前半、約52㎡、約64㎡の3種類に分類できる。掘立柱の柱掘方は一辺1m以上、礎石も1m以上あるのが通常であり、一般集落の遺構より格段に規模が大きく、圧巻である。（飯田市教育委員会 羽生俊郎）





## 信州の近代遺跡

# ——伊那に眠る巨大な戦争遺跡「陸軍伊那飛行場」——



写真：伊那市教育委員会提供「練習機赤とんぼ」

現在、水田や住宅団地、工業団地が広がり、市街地の一部として姿を変えている、南北約 2.5km、東西約 0.8kmの広大な平地、かつてそこに巨大な戦争遺跡である陸軍伊那飛行場があった。

太平洋戦争開始から 4 か月後の 1942 年 4 月、米軍による本土空襲が初めて行われた。これに大変な衝撃を受けた軍部は、伊那の 3000 m 級の山々に囲まれた谷合地形に隠匿飛行場を建設する計画を建てる。

1943 年 4 月に飛行場用地が決定、陸軍により土地取得が始まる。

土地は一坪 1 円 70 銭で買収された。当時、飛行場建設作業の給料が 1 日 3 円 55 銭だったので、相当な安値で買収されていたことがわかる。

同年 8 月から始まった飛行場建設は、飛行場設定練習部隊が中心となり、他の陸軍施設部隊も参加した。建設会社も加わり、その中に 200 人ほど朝鮮の人達も雇われていたという。11 月、地域住民の大動員が命じられ、地元住民、中学生（現伊那北高校生）のほか、近隣の村民、学生等 600 人が作業を行った。大型重機を導入し、2つの沢が埋め立てられたが、作業の大半はリヤカー・もっこ等の人力で行われた。格納庫、兵舎、弾薬庫なども作られ、飛行場北東の松林には、盛土で掩体壕が 20 か所設けられた。1944 年 9 月の開港当初は、熊谷陸軍飛行学校の分教場となり、天竜川と三峰川によって作られた河岸段丘の先端が巨大な航空母艦の艦首のように見え、飛行場は空母に発着艦するという想定で使用されたともいう。しかし、戦況の悪化に伴い、補給戦隊の基地として物資輸送に使われるようになった。その後、終戦までのわずかな期間、「隼」、「鍾馗」といった戦闘機を扱った。

現在、上の原保育園の子ども達元気な遊び声が聞こえるその目の前に、かつての第二格納庫の頑丈なコンクリート基礎が 40 m 残されている。また近くにはレンガ作りの弾薬庫や自動車庫の基礎も見られる。

戦後、この飛行場は、しばらくその存在を忘れ去られていた。しかし、地元高校生達はその歴史を掘り起こし、格納庫基礎の前には研究成果をまとめた説明看板が設置された。そして今は平和の大切さを伝える場となっている。

（伊那市教育委員会 瀨 慎一）



現存する格納庫のコンクリート基礎



米軍撮影の旧陸軍伊那飛行場航空写真（1947 年）  
（写真中央の長方形部分が滑走路）



## 埋文本棚



「戸沢充則という考古学者がいた。」この一文から本は始まり、一冊を読み終えたのち冒頭に戻ると、この一文が身に染みる。

戸沢充則氏は戦後の先土器時代（旧石器時代）・縄文時代研究で多数の業績を残し、“市民と学ぶ考古学”や多くの遺跡保存を実現し、旧石器捏造事件に係る検証作業を牽引するといった数多くの功績を持つ。『考古地域学を学ぶ—戸沢充則の考古学』では、戸沢氏のもとで考古学を学んだ8名の教え子たちが戸沢氏の功績を紹介する。内容は「考古学研究」「学問を育むもの」「社会への責任」から成るが、それぞれ功績のみ紹介するのではなく、そこに至る学問の流れや社会情勢、戸沢氏の信念が記されている。執筆者たちの一文一文からは、戸沢氏の人柄も感じられる。

旧石器・縄文時代に関する研究方法や“市民のため考古学”が生まれた背景を学ぶ学術書としても、「戸沢充則という考古学者」の生き様を知る人物伝としても、何度も読み返したい一冊である。

（杉木有紗）

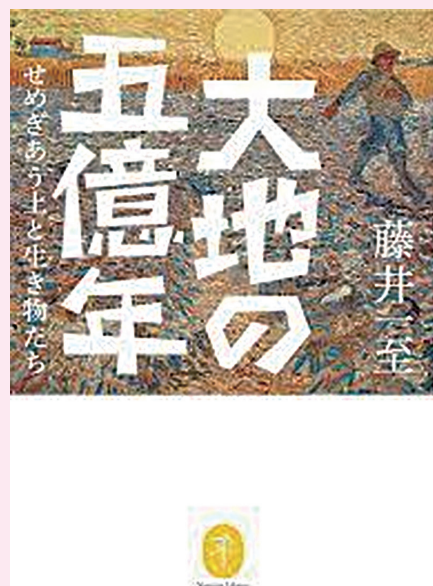
（「考古地域学を学ぶ—戸沢充則の考古学」海戸塾編／新泉社）

発掘調査現場において、毎日瞳に焼き付けている「土」。一体どこからきて、どんな歴史を刻んできたのだろうか。本書は地球上に土が誕生して以来、植物や昆虫の躍進や人類の繁栄を通して生き物たちと相互に影響しあいながら変動した、土と生命の壮大な物語を記している。

第一章では土をめぐる自然現象の精密さを、第二章では五億年を通して動植物が見せた土壌への適応力を、第三章では一万年かけてヒトが編み出した土生の歴史を丹念に掘り起こす。ただいのちを育むだけではなかった土の実像、翻弄されるだけではなかった生き物たちの姿から、未来を模索したい。

気候変動や持続可能な開発目標、肥料・燃料の供給不足や価格高騰。昨今、土を取り巻く情勢の変化は暗いものが多い。それでも耕し方によって土壌を劣化することも改良することも出来るという土からの前向きなメッセージが本書には込められている。遺跡の保存と活用に取り組む者として、今改めて五億年の歴史に学びたい。（水科汐華）

（「大地の五億年」藤井一至 著／山と溪谷社）









## ど ぐうふだしよ 「三十三番土偶札所巡り」

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」を構成する長野県と山梨県の17施設を巡り、オリジナルの御朱印を集める「三十三番土偶札所巡り」がとても好評である。特製の御朱印帳はこれまで青色一色であったが、このたびピンク色が加わった。「星降る中部高地の縄文世界」では、茅野市から出土した国宝「縄文のヴィーナス」「仮面の女神」のほかにも、魅力あふれる土偶が多く出土している。17施設にある33点の御朱印を集め、数千年をさかのぼり縄文人の生活に出会う旅をはじめてみてはいかがだろうか。御朱印帳は1冊1,980円（税込）。長野県内では川上村文化センター、諏訪市博物館、茅野市尖石縄文考古館、長和町原始・古代ロマン体験館、長和町黒耀石体験ミュージアム、富士見町井戸尻考古館、八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）で購入することができる。



## 「令和5年度 山の洲文化財交流展」

フォッサマグナ（糸魚川・静岡構造線）でつながる中央日本四県（静岡県・山梨県・長野県・新潟県）には、それぞれに個性豊かな文化財があり、古くから交流があったことが知られている。その交流を示す展示会「山の洲文化財交流展」が、7月1日（土）から8月20日（日）まで、長野県立歴史館で開催されている。新潟県に特徴的な<sup>かえん</sup>火焰型土器やヒスイ、静岡県出土の信州産石材で製作された弥生時代の磨製石斧、山梨県<sup>か い ち ょ う し づ か</sup>甲斐<sup>かんじょうにゆうしんじゅうきょう</sup>鉾子塚古墳出土の環状乳神獣鏡など、普段長野県では見る機会が少ない出土品や、四県の交流が<sup>うかが</sup>窺われる出土品が展示されている（複製品を含む）。同時に開催中の長野県立歴史館夏季企画展「主張する古墳～新たなシナノの古墳時代像～」と併せてご覧いただきたい。なお、「山の洲文化財交流展」はこの後、新潟県立歴史博物館、山梨県立考古博物館、静岡県立美術館を巡回する。



（長野県教育委員会 賛田 明）





植物学者<sup>まきの とみた ろう</sup>牧野富太郎博士をモデルにしたNHKの朝ドラ「らんまん」が、4月からはじまった。ドラマの主人公<sup>まきの まん たろう</sup>槇野万太郎は、東京大学植物学教室の教授から出入りを許される。この教授は、理学部生物学科初代教授の<sup>や た べりようきち</sup>矢田部良吉がモデルと考えられている。矢田部良吉と聞いてピンときた方は、なかなかの考古学通で、大森貝塚の報告書を訳した人と当てられた方は、考古学史に精通していると言ってよい。

改めて紹介するまでもなく、大森貝塚はアメリカの動物学者エドワード・シルヴェスター・モースが、来日まもなく横浜から新橋へ移動する車中で発見した貝塚である。1877年9月16日に初めて踏査し、以後4回の調査を経て、1879年7月「SHELL MOUNDS OF OMORI」が、12月に和文版「<sup>おおもりかいきよこぶつへん</sup>大森介墟古物編」が刊行された。朝ドラに触発されて、書棚の奥にかくれた岩波文庫『大森貝塚』を探しだし、ひさしぶりに読んでみた。

この研究報告が多くの研究者によって絶賛されるのは、「観察と実験を土台とする科学的精神の発現そのもの」(近藤・佐原 1983)である点に集約される。例えば土版について、表裏面と側面の「実測図」を掲載、寸法、紋様構成、施紋方法、焼成、色調、加工、使用痕や欠損状態を観察して、海外の岩版を参照しながら、用途を考えている。スタンプ、武器、装身具、おもり、貨幣などを考慮しつつ、第一案として輪投げに似たゲームの道具、二案は権威のしるし、三案は護符か呪術師のまじない札と「推量」した。出土遺物は、おしなべてこうした記述で一貫している。ちなみに、土版についてモースの「推量」を超える学説をいまだ聞かない！

前号の「埋文ほっと情報」では、当センターをめぐる目覚ましい体制変革や技術革新が紹介された。おおいに楽しみでもある。しかし、それが目的化してしまうと、モースやその周囲の人びとが大切にしてきた何かを見失ってしまわないか。今、そのことを考えてみるのも面白い。

さて、きょうも「愛の花」をハミングしながら、発掘現場に向かうとしよう。(平林 彰)

引用文献 近藤義郎・佐原真 1983「解説」『大森貝塚』186頁 岩波文庫



「大森貝塚遺跡庭園」にて

## 編集後記

『信州の遺跡』21号では、当センターが調査中の3遺跡のほか、飯田市教育委員会と伊那市教育委員会から情報提供をいただくことができました。「百済土器」や「直弧文施文高坏」の出土、恒川官衙遺跡の成果は、古くから長野県に暮らした人々が、中央や大陸とのかかわりの中で生活していたことを物語る重要な成果と思われます。また、陸軍伊那飛行場跡は、戦争とそれに翻弄された人々、そして平和の尊さを伝える貴重な文化財です。

御多忙の中、原稿を執筆いただいた皆様のおかげをもちまして、今号も内容豊かな情報誌とすることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。(村井大海)

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：信毎書籍印刷株式会社

この冊子は、令和5年度 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。

本号で掲載した遺跡位置

